

『東瀛詩選』に見られる兪樾の修改

——菅茶山の『黄葉夕陽村舎詩』との比較を通して——

郭 穎

はじめに

菅茶山（一七四八—一八二七）は名を晋帥と言い、広島県神辺の出身で、江戸後期を代表する詩人である。彼の漢詩集『黄葉夕陽村舎詩』は、文化九年（一八一二）から天保三年（一八三二）にかけて刊行され、全三十巻から成っている。詩の排列順序から見て、清末の学者兪樾は日本漢詩集『東瀛詩選』を編纂する際、この『黄葉夕陽村舎詩』を参考にして、その中から百二十首の詩を採録したことが分かる。⁽¹⁾

兪樾は菅茶山について、

字禮卿、號茶山、備後人。著有黄葉夕陽村舎詩八卷。禮卿、詩各體皆工。而憂時感事之忱、往往流露行間、亦彼中有心人也。其「開元琴」一首、借題抒憤、可想見其懷抱。七律中如「耕牛」・「龍盤」等題、皆摘首句二字爲題、實非題也。命意所在、亦有不可

揣測者。然語意悲壯、氣骨開張、不失爲名作。（字は禮卿、號は茶山、備後の人なり。著に黄葉夕陽村舎詩八卷有り。禮卿、詩の各體皆工なり。而して時を憂へ事に感ずるの忱、^{まこと}往往行間に流露し、亦た彼中に心有るの人なり。其の「開元琴」一首、題を借り憤りを抒べ、^{いさどほ}其の懷抱を想見すべし。七律の中「耕牛」・「龍盤」等の題の如きは、皆首句の二字を摘りて題と爲すも、實は題に非ざるなり。命意の在る所も、亦た揣測すべからざる者有り。然れども語意は悲壯にして、氣骨は開張して、名作たるを失はず。）

と高く評価している。⁽²⁾

その一方、兪樾は菅茶山の作品を収録した時、修改も加えている。本稿では、『東瀛詩選』と『黄葉夕陽村舎詩』の異同を考察して、兪樾の日本漢詩に対する修改方針を明らかにする一助としたい。⁽³⁾

一 避諱

- ・第8首（前編卷一15）「有鳥三首有感而作」其一：音聲令人悅、毛彩使人眩↓眩
- ・第32首（前編卷二36）「行路難爲某生作」其二：我絶玄海踰蘇山、輪摧柁折猶生還↓元
- ・第36首（前編卷二59）「田家」：陂塘開風始薰、野川堰成路正濶↓濶
- ・第38首（前編卷三40）「開元琴歌西山先生宅同諸子分賦席上器玩余得此」：黝髹半剝梅花斷、冰色偏昏流水絃↓絃
- ・第56首（前編卷五62）「題李溪居士擬古詩卷後應賴千秋需」：少年恃才且夸富、搜覓餛飩街奇珍↓街
- ・第70首（前編卷八51）「浦島子歸家圖」：鼉鼓蟹絃侑醺醪、蟹魚魴瓣紅螺杯↓絃
- ・第74首（後編卷一22）「春日出遊寄道光師」：春風何處無遊嬉、林丘自與野性宜↓丘
- ・第103首（後編卷五2）「人日與諸子分勝裡金花巧耐寒句爲韻得巧字」：今日是人宜盡歡、我才非鬼寧爭巧↓奚
- ・第113首（後編卷七71）「大槻玄澤六十壽言」↓元
- ・第113首（後編卷七71）「大槻玄澤六十壽言」：吾願先生壽不騫、益鍊其術弘其傳↓宏

「玄」は清の聖祖玄燁の諱なので、兪樾はそれを避けるため、「眩」（第8首）、「元」（第32首）、「絃」（第38首）、

「街」（第56首）、「絃」（第70首）、「元」（第113首）のように欠筆や別字にしている。また、「寧」は清の宣宗旻寧の諱、「弘」は清の高宗弘歷の諱、「丘」は孔丘の諱なので、「濶」（第36首）、「奚」（第103首）、「宏」（第113首）、「丘」（第74首）と同様に避諱している。⁴⁾

二 押韻・平仄の訂正

(1) 押韻

- ・第112首（後編卷七6）「二月廿六日竹田器甫甲原元壽西歸因憶去年與二子同還自荏都亦以是日發程賦此送別」：不知明年定何如、君在官羈我老衰。老衰隨觸易愴神、一朝況送二故人↓矣、我

原作の6句目と7句目「君在官羈我老衰。老衰隨觸易愴神」（君は官羈に在りて我は老衰たり。老衰觸に隨ひて愴神し易く）を「君在官羈我老矣。老我隨觸易愴神」（君は官羈に在りて我は老ゆ。老いし我觸に隨ひて愴神し易く）に修改している。この原詩の脚韻は、「程」・「行」・「喜」・「衰」・「人」・「春」・「別」・「日」である。2句目の「程」と4句目の「行」が下平声八庚韻と下平声七陽韻、10句目の「人」と12句目の「春」が上平声十一真韻、14句目の「別」と16句目の「日」が入声九屑韻と入声四質韻である。6句目の上声四紙韻の「喜」と8句目の上平声三江韻の「衰」のみ韻が合わない。そこで、兪樾は8句目の句末の「衰」を上声四紙韻の「矣」に改めるこ

とで、6句目の「喜」と韻を合わせている。この修改によつて、次句上二字も「老我」に改めたと思われる。

(2) 平仄

- ・第3首（前編卷一8）「感事贈拙齋先生」其三：嚴冬繁霜雪、我心多憂端↓鬱不伸
- ・第34首（前編卷二59）「偶成」：人生須臾有興廢、海潮昏旦自波瀾↓世
- ・第73首（後編卷一17）「中秋無月有期不至賦此代柬」：秋來計日待會見、豈知君心容易變↓相

第3首の「多憂端」は平三連、第34首の二字目の「生」と四字目の「臾」は同じ平声、第73首の「待會見」は仄三連なので、修改している。

三 表現の修正

- ・第11首（前編卷一20）「御領山大石歌」：如今朝野尚因循、苟有所爲觸渠噴↓人所
- ・第16首（前編卷一46）「春郊」：問字頻過楊子宅、袖茶時叩玉川門↓送
- ・第19首（前編卷一50）「吉備公廟」：爲能血食經千歲、轉信和羹美一時↓始
- ・第27首（前編卷二8）「麗譙」：芳草柳陰羣牧馬、夕陽花外杙漁舟↓眠
- ・第32首（前編卷二36）「行路難爲某生作」其二：神龍能

變化、躍在淵飛在天↓則在

- ・第56首（前編卷五62）「題李溪居士擬古詩卷後應賴千秋需」：江南名家如鰈魚、獨有李溪寂聲塵↓鯽
- ・第71首（前編卷八73）「元日」：樂事要相及、浮生附奈何↓能幾
- ・第109首（後編卷六38）「上巳涉大猪水作懷伊勢藤子文」：同人建議除酒肴、相慶兼亦作三已↓上
- ・第113首（後編卷七71）「大槻玄澤六十壽言」：不龜手方非異藥、運用在心人誦度↓難

第11首の「如今朝野尚因循、苟有所爲人所噴」（如今朝野因循を尚ぶ、苟くも爲す所有れば人の噴る所となる）の下句は、原詩では「苟有所爲觸渠噴」（苟くも爲す所有れば渠の噴りに觸る）に作る。愈樾は「渠」が俗語的で雅ではないと思つて改めたのであろう。

第16首の「問字頻過楊子宅、送茶時叩玉川門」（字を問ひて頻りに過ぎる楊子の宅、茶を送りて時に叩く玉川の門）の下句は、原詩では「袖茶時叩玉川門」（茶を袖にして時に叩く玉川の門）に作る。奇字のことについては揚雄のもとを尋ね、お茶の葉を持つて盧仝のドアを叩くという意味である。揚雄は古文字をよく知っていたので、酒を携へて行つて問ねる者が多い。盧仝は號が玉川子であり、茶を好むことで世間に知られている。「袖茶」という言葉は、宋代禅僧釈慧空の「贈齡首座主庵」其三の「待我寒衣都補了、袖茶來訪饒頭邊」（我が寒衣の都て補了す

るを待ちて、茶を袖にして來訪す（鑊頭の邊）にも見られる。これは、茶葉ではなく、湯を注いだお茶を袖にくるむ意である。中国の詩で、「袖」の字を動詞に使うときは、一般的に隠しておく意になる。例えば、「古詩十九首」其十七（『文選』卷二十九）に「置書懷袖中、三歳字不滅」（書を懷袖の中に置き、三歳字滅せず）とあるように、手紙などの私物を袖に入れていたのである。後に、「袖手」・「袖鉗鎚」・「袖詩」など、手や武器、または詩作を袖に隠す意で使われている。私物や、人目に触れては困る物を隠すのが「袖く」であるので、人にものを贈る時には使用しない。俞樾は、「袖茶」の表現に違和感を懷いて、「送茶」に変えたであろう。

第19首の「爲能血食經千歳、始信和羹美一時」（爲に能く血食し千歳を経、始めて信ず和羹一時に美なるを）の下句は、原詩では「轉信和羹美一時」（轉た信ず和羹の一時に美なるを）に作る。今千年を経て初めて吉備公の当時の政策が良かったと信じられるという意味である。「轉」（次第に）より、「始」の方が適切だと判断し、改めたと思われる。

第27首の「芳草柳陰眠牧馬、夕陽花外杙漁舟」（芳草柳陰に牧馬眠り、夕陽花外に漁舟を杙ぐ）の上句は、原詩では「芳草柳陰羣牧馬」（芳草柳陰に牧馬羣がる）に作る。木陰のあたりに馬が群がり、夕陽が照らす花の向こうでは漁船が繋がれているという意である。中国語では「群馬」は、群がる馬の意であり、「群」が動詞として

「馬」の前に置かれることはない。そこで、俞樾は動詞として違和感が無く、更にのんびりとした休息の雰囲気も与えることのできる「眠」の字に改めたものと思われる。

第32首の「神龍能變化、躍則在淵飛在天」（神龍能く變化し、躍れば則ち淵に在り飛べば天に在り）の下句は、原詩では「躍在淵飛在天」（躍れば淵に在り飛べば天に在り）に作る。六言の句に「則」の一字を入れることで、五言と七言の組み合わせに改め、詩句のリズムを整えるようにしたのである。

第56首の「江南名家如鯽魚、獨有李溪寂聲塵」（江南の名家の鯽魚の如きも、獨り李溪有りて聲塵寂たり）の「鯽魚」は、原詩では「鰕魚」に作る。「鰕魚」は鰕のこと、中国人にとって馴染みがないので、「鯽魚」（ふな）に改めたと思われる。

第71首の「樂事要相及、浮生能幾何」（樂事相ひ及ぶを要むれども、浮生能く幾何ぞ）の下句は、原詩では「浮生附奈何」（浮生附すること奈何）に作る。「附奈何」は聞き慣れない言葉で意味が分かりにくいので、「能幾何」に改めたのである。

第109首の「同人建議除酒肴、相慶兼亦作上巳」（同人議を建てて酒肴を除き、相ひ慶して兼ねて亦た上巳を作す）の「上巳」は、原詩では「三巳」に作る。茶山は平仄の関係で、「三」にしたと思われるが、これは古詩なので、平仄に拘らず詩題に従って「上」に改めたと思われる。

る。

第113首の「不龜手方非異藥、運用在心人難度」（不龜手の方異藥に非ず、運用心に在り人^{はか}度り難し）の「人難度」は、原詩では「人誰度」（人誰か度らん）に作る。手足のひびやかぎれを防ぐ藥は特別なものではなく、それを上手く活用できるかどうかは、その人の心の次第だという意である。「人誰度」は反語の表現で、誰も推測することができないという完全な否定の意味になるので、改めたのであろう。

四 詩句削除

次の七首は、『東瀛詩選』では、削除された箇所がある。傍線部が兪樾によつて削除された部分である。

・第6首「寄肥後藪先生」其一

昇平百餘年	昇平百餘年
人文隨日盛	人文日に隨ひて盛んなり
作賦輕楊馬	賦を作りては楊馬を輕んじ
談經蔑盧鄭	經を談じては盧鄭を蔑む
周末競奇論	周末奇論を競ひ
晉初尚怪行	晉初怪行を尚ひ
時名或得之	時名或いは之を得るも
無迺叛先聖	迺 ^{なほ} ち先聖に叛くこと無からんや
大道竟多岐	大道には竟に岐多し
憑誰辨邪正	誰に憑 ^よ つて邪正を辨ぜん

西方有美人	西方に美人有り
容姿也罕比	容姿も也た比 ^{たくひまれ} 罕なり
腰有蕙芭佩	腰に蕙芭の佩有り
身著芰荷衣	身に芰荷の衣を著 ^つ く
所服雖麗朴	服する所は麗朴なりと雖も
所居生光輝	居る所は光輝を生ず
吾欲從之遊	吾は之に従ひて遊ばんと欲するも
無翼可奮飛	翼の奮飛す可き無し

「西方」とは、肥後の国をさしている。「美人」とは才徳の優れた人で、ここでは菅茶山が詩を寄せた相手である藪先生を指す。前半部分では当時の学問の流派が色々あって、どれが良いのかどれが良くないのか判断し難いと詠っている。「西方」以下の後半では、藪先生を褒め、先生の所に行きたいと詠う。菅茶山は藪先生への思いを中心に詠ったのだが、兪樾は前半の学問に関する部分のみ関心があつたので、後半の情の部分は採録しなかつたのであろう。

・第7首「寄肥後藪先生」其二

我本農家子	我れ本と農家の子
生長事躬耕	生長して躬耕を事とす
一朝改舊業	一朝舊業を改め
追師學聖經	師を追ひて聖經を學ぶ
聖經豈易學	聖經豈に學び易からんや

驚駘苦脩程 驚駘 脩程に苦しむ

中間罹疾病 中間 疾病に罹り

形迹乖素誠 形迹 素誠に乖く

青年如流水 青年は流水の如く

蹉跎何所成 蹉跎として何の成す所ぞ

隴畝漸就荒 隴畝は漸く荒に就き

詩書未能明 詩書は未だ明らかにすること能はず

思之心自愧 之を思ひて心に自ら愧じ

輾轉徹雞鳴 輾轉して雞鳴に徹す

洲上杜蘅草 洲上の杜蘅草

隔岸揚芳馨 岸を隔てて芳馨を揚ぐ

欲採臨渡口 採らんと欲して渡口に臨めば

秋水淼盈盈 秋水は淼として盈盈たり

中間の「中間罹疾病、形迹乖素誠。青年如流水、蹉跎何所成」は、菅茶山が修学の途中で病気に罹り、素志に背いてしまい、若い時代は流水の如くに過ぎ去り、つまり何もうも成就するところがなかったと述懐するところである。この四句は詩全体の雰囲気や暗くし過ぎ、雅を損ねるために削除されたであろう。

・第8首「有鳥三首有感而作」其一

有鳥丹穴來 鳥有り 丹穴より來り

將雛息城門 雛を將ゐて城門に息ふ

音聲令人悅 音聲 人をして悦ばしめ

毛彩使人眩 毛彩 人をして眩ましむ

自稱鳳凰使 自ら鳳凰の使と稱し

頗能張威權 頗る能く威權を張る

攫身嚇鷺輩 攫身を攫てて鷺輩を嚇し

刷毛狎鵝班 毛を刷きて鵝班に狎る

雜禽接武至 雜禽 武を接して至り

嬌媚各爭先 嬌媚 各おの先を爭ふ

爪牙與羽翼と

儔侶日滋繁

且謂失此時 且つ謂へらく此の時を失はば

何日飽美鮮 何れの日か美鮮に飽かんと

群噪逞所欲 群噪 欲する所を逞しうし

四境自騷然 四境 自ら騷然たり

此鳥本微賤 此の鳥本微賤にして

貧狡比鳥鳶 貧狡なること鳥鳶に比す

既許巢廚廩 既に廚廩に巢くふを許さる

誰禁恣噬吞 誰か恣に噬吞を 恣にするを禁ぜんや

既許居樞要 既に樞要に居るを許さる

誰禁播兇殘 誰か兇殘を播くを禁ぜんや

君自百禽長 君自ら百禽の長

勿惑姦鳥言 姦鳥の言に惑ふこと勿れ

これは太平の瑞鳥を姦鳥と對比させる詩で、権力の象徴である鳳凰が現れた時には、どんな鳥でも近寄ってくるものなので、鳳凰は悪い鳥の話に惑わされないように

してほしいという内容が詠われている。「且謂失此時、何日飽美鮮」の二句は、良い時期を見逃したら、もう新鮮な肉が食べられなくなるだろうという警告、そして、「既許巢廚廩、誰禁恣噬吞。既許居樞要、誰禁播兇殘」の四句は、一旦悪い者を任用すると、取り返しがつかなくなってしまうという訓戒である。この六句は、あまり雅な表現ではなく、詩の品格を保つために、削除したものと考えられる。

・第9首「有鳥三首有感而作」其二

朝翔鷺社側

朝には鷺社の側に翔び

夕止鷄桀邊

夕には鷄桀の邊に止まる

竦翮且張觜

翮を竦かし且つ觜を張り

瞿瞿微嚙端

瞿瞿として嚙端を微ふ

本欲肥其軀

本は其の軀を肥やさんと欲し

非爲酬君恩

君恩に酬ゆる爲に非ず

本欲美其室

本は其の室を美しくせんと欲し

非爲救下民

下民を救ふ爲に非ず

弱羽亦何罪

弱羽亦た何の罪かある

嘒嘒心膽寒

嘒嘒として心膽寒し

吐己口中食

己の口中の食を吐き

供渠盤上餐

渠を盤上の餐に供す

不然觸其怒

然らずんば其の怒に觸れ

覆巢難再全

覆巢再び全かり難し

各自謀免禍

各自禍を免れんと謀る

喙息誰得安	喙息誰か安きを得ん
君栖碧梧枝	君は碧梧の枝に栖む
寧知巧智根	寧ぞ巧智の根を知らんや
計成一飽颺	計成りて一に飽颺せん
羅捕竟應難	羅捕竟に應に難かるべし
願借鸚鵡舌	願はくば鸚鵡の舌を借り
一言發其姦	一言もて其の姦を發せん
願借鵬鷺爪	願はくば鵬鷺の爪を借り
一擊肉其肝	一擊もて其の肝を肉にせん

この詩は、全体を通して当時政權を握っていた者に対する不満の気持ちを表した詩になっている。疊語や繰り返しの表現などを使い、民謡風に作られているのも一つの特徴と言えよう。その中、「各自謀免禍、喙息誰得安。君栖碧梧枝、寧知巧智根。計成一飽颺、羅捕竟應難」の六句は、「鳥たちがみんな明哲保身を考えて、毎日戦々恐々とした日々を送っている。あなたは高い位にいるのに、なぜこのような悪い性質を持っているのだろうか。結局取れる分だけ全て盗んで、その後で逃げるつもりなのだろう。逃げ去ったら誰もあなたを捕まえることはできないから」という意。これは赤裸々に残酷な統治者を批判していて、表現自体があまり雅と言えず、ほかの部分と調和していないと感じて、削除したのではないかと思われる。

・第10首「有鳥三首有感而作」其三

姦鳥多種類 姦鳥種類多く
 相呼互攀援 相ひ呼びて互ひに攀援す
 惡水溢其傍 惡水其の傍に溢れ
 腐鼠滿其前 腐鼠其の前に滿つ
 烏鳶方得意 烏鳶方まさに意を得て
 唼喋日囂喧 唼喋日まび囂喧たり
 鬼雀謂仙鶴 鬼雀仙鶴に謂ふ
 何獨甘辛酸 何ぞ獨り辛酸に甘んぜんや
 羣情異所趨 羣情趨く所異なるも
 念慮在顯尊 念慮は顯尊に在り
 淒淒守賤辱 淒淒として賤辱を守るに
 何須才與賢 何ぞ才と賢とを須もちひん
 百物殊所營 百物營む所殊なるも
 憂虞在饑寒 憂虞は饑寒に在り
 昂昂背流俗 昂昂として流俗に背き
 無迺愚且頑 迺すなはちち愚にして且つ頑なること無かれ
 不如降其志 如かず其の志を降し
 從我且翩翩 我に従ひて且つ翩翩たらんには
 小以飽芳餌 小にして以て芳餌に飽き
 大以乘華軒 大にして以て華軒に乗らんと
 仙鶴不能答 仙鶴答ふること能はず
 垂翅再三嘆 翅を垂れて再三嘆ず
 誰識凌霄姿 誰か識らん凌霄の姿
 元自厭腥膻 元自ら腥膻に厭あかんとは

これは鶴が鳥に説教される詩である。毎日汚れ水と腐鼠を食べ物にし、簡単に生活を維持する鳥や鳶は、志の高い鶴に、「あなたも今の意気高く世俗を無視する。頑固な生き方を止めて、我々のように、志操を低俗化にすべきだ。そうしたら、飢えにも生活にも憂えることはないだろう」と勧めた。冒頭からの二十句は全部鳥の描写で、鶴の部分は最後の四句しかない。その上、「羣情異所趨、念慮在顯尊。淒淒守賤辱、何須才與賢。百物殊所營、憂虞在饑寒。昂昂背流俗、無迺愚且頑」の八句は雅な表現ではなく、詩全体の雰囲気も暗く感じさせる。そこで、兪樾は鳥の説教の中から、この八句を削除したと思われる。

・第38首「開元琴歌西山先生宅同諸子分賦席上器玩余得此」

雷珏之琴希代寶 雷珏の琴は希代の寶
 見今珍藏在何邊 見今 珍藏して何れの邊にか在る
 大和古刹富古器 大和の古刹は古器に富むも
 不許世人容易看 許さず世人の容易に看るを
 千請萬懇誰開庫 千請萬懇 誰か庫を開きし
 源生奇士得奇緣 源生奇士 奇縁を得たり
 黝髹半剥梅花斷 黝髹半は剥はげて梅花斷え
 冰色偏昏流水絃 冰色 偏ひとへに昏くらし 流水の絃
 書曰於九龍縣造 書して曰ふ「九龍縣に於いて造る

開元十二乙丑年

開元十二乙丑の年なり」と

廣狹脩短手自量

廣狹脩短 手自ら量り

清濁吟猱手自彈

清濁吟猱 手自ら弾す

摸貌歸家亟經始

摸貌 家に歸りて亟かに經始す

腹背一一典刑全

腹背 一一典刑全し

勝流相傳稱雅舉

勝流 相ひ傳へて雅舉と稱す

一時衆口藉藉然

一時 衆口 藉藉然たり

從此四方爭倣造

此れ從り四方 爭ひて倣造し

選匠擇材不惜錢

匠を選び材を擇びて錢を惜まらず

此琴當代稱難得

此の琴 當代 得難しと稱す

何論五季二宋間

何ぞ論ぜん 五季二宋の間

不意殊域萬里外

意はざりき殊域 萬里の外

永鎖鳳象在荒山

永く鳳象を鎖して荒山に在らんとは

後千餘歲遇知己

後千餘歲 知己に遇ひ

始將戔洋布人褰

始めて戔洋を將つて人褰に布く

維吾皇統垂無極

維れ吾が皇統 無極に垂れ

國無異姓仕世官

國に異姓無く仕へて官を世よにす

中古教化號隆盛

中古の教化は隆盛と號し

樂律和協禮儀端

樂律は和協し禮儀は端し

無乃靈物尋靈地

乃ち靈物の靈地を尋ね

乘桴遙向日東天

桴に乘りて遙かに日東の天に向かひ

及至騷擾深晦迹

騷擾に至るに及びて深く迹を晦まし

有待時運漸循環

時運の漸く循環するを待つ有る無か

先生所蓄亦雷樣

先生の蓄ふる所も亦た雷樣

音其古淡貌其妍

音は其れ古淡 貌は其れ妍なり

余今對此心多感

余は今 此に對して心に感ずること多し

長句不覺醉語顛

長句 覺へず 醉語の顛するを

維昔李唐全盛日

維れ昔 李唐全盛の日

歲修鄰好通使舩

歲どし鄰好を修めて使舩を通はす

滄波浩蕩如枉席

滄波浩蕩 枉席の如く

生徒留學動百千

生徒の留學 動もすれば百千

吉備研究盧鄭學

吉備研究す 盧鄭の學

朝衡唱酬李杜篇

朝衡唱酬す 李杜の篇

此時典籍多越海

此の時 典籍 多く海を越ゆ

豈止服玩與豆籩

豈に止に服玩と豆籩とのみならんや

一朝胡塵塞道路

一朝 胡塵 道路を塞ぎ

彼此消息雲濤懸

彼此の消息 雲濤懸かなり

鴉兒北歸郡國裂

鴉兒 北に歸りて郡國裂け

白雁南渡衣冠殫

白雁 南に渡りて衣冠殫く

我亦王綱一解紐

我も亦た王綱一たび紐を解き

五雲迷亂兵燹煙

五雲迷亂す 兵燹の煙

壇浦魚腹葬劍璽

壇浦の魚腹 劍璽を葬り

芳河花草埋錫鸞

芳河の花草 錫鸞を埋む

禍水有源言之醜

禍水には源有り 之を言へば醜なり

涓滴積成百尋淵

涓滴も積もりて百尋の淵を成す

爾來豪右耽爭鬪

爾來 豪右 爭鬪に耽り

人枕銀胄席金鞍

人は銀胄を枕にし金鞍を席とす

文物灰滅無餘燼

文物は灰滅して餘燼無く

鐘簾羊存屬等閑

鐘簾は羊存するも等閑に屬す

娼妓淫歌將校帳 娼妓は淫歌す 將校の帳
 俳優戲舞王侯筵 俳優は戲舞す 王侯の筵
 最恨軍府創新式 最も恨む 軍府の新式を創め^{はじ}
 衣斷雙袖頭免冠 衣は雙袖を斷ち頭は冠を免ずるを
 雅變風變同一轍 雅變風變は同一の轍
 時往事往誰追還 時は往き事は往き誰か追還せん
 幸今昇平人好古 幸ひに今は昇平にして人は古を好み
 朝野往往出才賢 朝野は往往にして才賢を出す
 若教清廟陳瑚璉 若し清廟をして瑚璉を陳べしむれば
 重見薰風被山川 重ねて見ん 薰風の山川を被ふを^{おほ}
 撫罷悵平襲綠服 撫し罷みて悵平として綠服を襲へば
 松聲斷續冬夜闌 松聲は斷續して冬夜 闌^{たけなほ}なり

「開元琴」とは、唐の玄宗皇帝の開元年間に雷珏が作ったとされる有名な琴をさす。それが日本に伝わってきて、法隆寺に收藏されていた。西山先生はこの開元琴を模造して自宅に展示していたという。詩全体は、前半部分で中国の名琴が日本に伝わったことから詠い始め、後半は日中両国交流の歴史について詠じるといった構成になっている。その中の「廣狹脩短手自量、清濁吟猱手自彈。摸貌歸家亟經始、腹背一一典刑全。勝流相傳稱雅舉、一時衆口藉藉然。從此四方爭倣造、選匠擇材不惜錢」の八句は、日本の琴作りの名人が唐の雷珏の琴の幅を実際に手で量ったり、弦の感触を手で感じたり、大金を費やして本物と見分けがつかないほど素晴らしい模造品を作

り出したことをいう。琴を模造する具体的な過程の描写は、他の部分と異質であり、この詩全体の優れた格調を損いかねないので、削除したのではないかと考えられる。また、「維吾皇統垂無極、國無異姓仕世官。中古教化號隆盛、樂律和協禮儀端。無乃靈物尋靈地、乘桴遙向日東天。及至騷擾深晦迹、有待時運漸循環。先生所蓄亦雷樣、音其古淡貌其妍」の十句は、唐代の素晴らしい琴は素晴らしい土地を求めるため、わざわざ海を渡って日本にやってきたのだということを述べている。俞樾は、清朝の文人として、当然「天下大国」の誇りを持っているので、ここに挙げたような、日本を中国よりも優れていると見なす表現を認めることができず、削除したのではないかと思われる。

おわりに

以上、俞樾が菅茶山の詩に対して、どのような修改を行ったのかについて見てきた。まとめると、以下の二点を指摘することができる。

まず第一に、日本人は漢詩を作る際に、漢文訓読によつて詩作を行うことが多いために、平仄に対する配慮が行き届かないこともしばしばあるのではないかと思われる。押韻や下三連の問題など、細かい部分に対する配慮が欠けることもある。特に、日本の漢字音に惑わされること。例えば「喜」と「衰」は、日本語では発音が比較的近いのに、実際には平仄が全く異なっている、という

ことになる。また仄三連に対しては気を配ることができても、中国人が最も嫌う平三連には気付かない、といったケースも見られる。平三連に対しては、中国の詩人は、仄三連より更に嫌うと言われている。仄三連の詩は中国の詩にも時々見られるが、平三連の詩はほとんど見ることがない。こうした問題に対して、愈樾は全く躊躇すること無く訂正を加えていると言える。

次に、表現については、中国人にとって使い慣れている表現パターンや、馴染みのある語句の組み合わせ方があるので、これに反している場合は、たとえ文法的に間違っていないくても違和感を生じる時がある。例えば「袖茶」や、「牧馬群」などがこれに相当する。また、「則」を入れて、中国語のリズムが大いに改善されるといった例もある。しかし、こうした中国語のリズムは、漢文訓読で読む時には全く反映されることが無く、逆に日本人にとっては「躍れば則ち淵に在り飛べば天に在り」のほうがリズムが悪く感じられるのかもしれない。このような、詩全体の意味内容に影響を及ぼさない箇所に対して、愈樾は中国人の目から見て、より正確で誤解を招かないように、また意味が曖昧にならないように、といった観点から語句のレベルで修改を行っている。

そして勿論、詩句削除の所で挙げたように、詩全体に影響を与える修改の例もある。他の部分と比べて表現が雅でない、或いは前後と比べて格調の面で落差を生じて、詩の雰囲気落とす部分や、詩の主題ではないある一部

分の描写が細かすぎたりといった箇所に対しては、詩全体の品性を保つために、愈樾は思いきって数句単位や一段落丸ごとの削除を行っている。

ただ、他の日本漢詩人と比べると、菅茶山詩における愈樾の修改箇所には、文法的な訂正が非常に少なく、このことは菅茶山の中国古典詩に対する造詣の深さを示すものと言えるであろう。また愈樾は、菅茶山詩に対して詩句削除を比較的多く行っており、それは訂正というよりも、むしろ詩全体の雰囲気や、格調を保つための修正であろうと考えられる。

では、その他の詩人の作品に対して、愈樾はどのような修改を行ったのだろうか。今回、菅茶山に見られたのと同じような基準に基づいているのか、或いは異なっているのか、この問題については『東瀛詩選』全体の修改箇所を見る必要がある、その上で、愈樾の修改方針が明確になるものと思われる。今後は、菅茶山以外の詩人についても『東瀛詩選』との校勘を行い、これによって愈樾の日本漢詩に対するとらえ方を明らかにできればと考えている。

注

(1)『東瀛詩選』巻十一に採録されている、菅茶山詩は、次の通りである。上の第〇首は『東瀛詩選』所収の菅茶山詩の配列番号を示し、(一)内は『黄葉夕陽村舎詩』の詩に巻数ごとの配列順を付したものである。

- 第1首「感事贈拙齋先生」其一、其五（前編卷一 6）
- 7 · 8 · 9 · 10
- 第6首「寄肥後菰先生」其一、其二（前編卷一 11 · 12）
- 第8首「有鳥三首有感而作」其一、其三（前編卷一 15）
- 16 · 17
- 第11首「御領山大石歌」（前編卷一 20）
- 第12首「送別」（前編卷一 30）
- 第13首「松間」（前編卷一 34）
- 第14首「耕牛」（前編卷一 43）
- 第15首「龍盤」（前編卷一 44）
- 第16首「春郊」（前編卷一 46）
- 第17首「山居」（前編卷一 47）
- 第18首「狂痴」（前編卷一 48）
- 第19首「吉備公廟」（前編卷一 50）
- 第20首「時情」（前編卷一 51）
- 第21首「江州」其一、其二（前編卷一 52 · 53）
- 第23首「偶作」（前編卷一 61）
- 第24首「上成川上即事二首」其一、其二（前編卷一 67）
- 68
- 第26首「歲杪寄中山子幹」（前編卷一 91）
- 第27首「麗譙」（前編卷一 8）
- 第28首「璇璣」（前編卷一 11）
- 第29首「村亭」（前編卷一 12）
- 第30首「呈大肇上人兼寄林元隆」（前編卷一 16）
- 第31首「行路難爲某生作」其一、其二（前編卷一 35）

- 36
- 第33首「幽齋」（前編卷二 42）
- 第34首「偶成」（前編卷二 59）
- 第35首「柏谷途中」（前編卷二 68）
- 第36首「田家」（前編卷二 79）
- 第37首「笨車」（前編卷三 3）
- 第38首「開元琴歌西山先生宅同諸子分賦席上器玩余得此」（前編卷三 39）
- 第39首「即事」（前編卷三 42）
- 第40首「丁屋路上」（前編卷三 54）
- 第41首「夏日即事」其一、其二（前編卷四 1 · 2）
- 第43首「望野間內海感源典廐作」（前編卷四 50）
- 第44首「蠣崎公子將還松前攜具圓山宴別諸子席上有詩次韻以謝時余亦西歸」（前編卷四 67）
- 第45首「病後松虞臣來訪分得韻蕭」（前編卷四 85）
- 第46首「三月盡日同諸子賦分得斜字」（前編卷四 88）
- 第47首「俠客二首」其一、其二（前編卷四 93 · 94）
- 第49首「浦子兼將探九州諸勝留宿草堂有詩見贈次韻以酬」（前編卷四 95）
- 第50首「次光師韻」（前編卷四 121）
- 第51首「城傍曲五首」其一、其五（前編卷五 29 · 30）
- 31 · 32 · 33
- 第56首「題李溪居士擬古詩卷後應賴千秋需」（前編卷五 63）
- 第57首「赤馬關懷古」其一、其二（前編卷五 64 · 65）
- 第59首「備後三郎題詩櫻樹圖」（前編卷五 73）

- 第60首「長門楊井謙藏袖詩見訪次韻以謝」(前編卷五105)
- 第61首「家弟沒後得六如上人書」(前編卷五122)
- 第62首「富士圖」(前編卷六11)
- 第63首「尋涼二首」其一、其二(前編卷六15・16)
- 第65首「諸葛武侯像」(前編卷六23)
- 第66首「九日與道光上人話舊上人有詩次韻賦呈」(前編卷六42)
- 第67首「黃安跨龜圖」(前編卷六63)
- 第68首「問妹病途中作」(前編卷八28)
- 第69首「西林寺詩會分得韻東」(前編卷八44)
- 第70首「浦島子歸家圖」(前編卷八51)
- 第71首「元日」(前編卷八73)
- 第72首「茶梅」(前編卷八81)
- 第73首「中秋無月有期不至賦此代柬」(後編卷一17)
- 第74首「春日出遊寄道光師」(後編卷一22)
- 第75首「橫尾途上」(後編卷一29)
- 第76首「故福山侯聰敏公廟」(後編卷一38)
- 第77首「龜井空石還自江戶賦贈」(後編卷一60)
- 第78首「偶檢巾箱得亡友藤井蘭水荳波子裕松井子璐高見新助書悽然賦此」(後編卷一75)
- 第79首「肥後本田子征對馬吉松千里將遊洛過余留宿分得韻歌」(後編卷一88)
- 第80首「雁」(後編卷一103)
- 第81首「日間即事」(後編卷二19)
- 第82首「小景」(後編卷二22)

- 第83首「晚翠堂壽筵余事牽不得會賦謝」(後編卷二31)
- 第84首「偶作」(後編卷二89)
- 第85首「西姬二子將有三原之行走筆賦贈」(後編卷二97)
- 第86首「村居二首」其一、其二(後編卷二99・100)
- 第88首「蕪屬國海上持節圖」(後編卷二126)
- 第89首「午日」(後編卷三18)
- 第90首「寄題逢原堂」(後編卷三21)
- 第91首「同君亮子成賦分得蘭字」(後編卷三25)
- 第92首「早春雜詩」(後編卷三48)
- 第93首「先妣十七回忌祭從鄉例行香淚餘賦此五首」其一、其二、其三、其四、其五(後編卷四3・4・5・6・7)
- 第98首「贈荳子行情見乎辭」(後編卷四11)
- 第99首「寄道光上人在京」(後編卷四33)
- 第100首「溪上晚歸」(後編卷四91)
- 第101首「秋柳分殘照西風白下門句爲韻余得白字」(後編卷四106)
- 第102首「與佐藤子文同往中條路上口號」(後編卷四136)
- 第103首「人日與諸子分勝裡金花巧耐寒句爲韻得巧字」(後編卷五2)
- 第104首「五月以藩命赴東都邸午日諸子來餞」(後編卷五15)
- 第105首「攝草路上」(後編卷五19)
- 第106首「石場路上」(後編卷五26)
- 第107首「疊原韻奉呈四明先生」(後編卷五49)
- 第108首「簡谷寫山」(後編卷六12)
- 第109首「上巳涉大猪水作懷伊勢藤子文」(後編卷六38)

- ・第110首「兔原道中」(後編卷六54)
- ・第111首「赤坂路上」(後編卷六83)
- ・第112首「二月廿六日竹田器甫甲原元壽西歸因憶去年與二子同還自荏都亦以是日發程賦此送別」(後編卷七6)

同還自荏都亦以是日發程賦此送別」(後編卷七6)

- ・第113首「大槻元澤六十壽言」(後編卷七70)
- ・第114首「七十誕辰」(後編卷七89)
- ・第115首「寄大藏謙甫在長府」(後編卷七134)
- ・第116首「伏水道中」(後編卷八28)
- ・第117首「楠公墓下作」(後編卷八44)
- ・第118首「清明簡友人」(後編卷八76)
- ・第119首「呈聽松上人」(後編卷八128)
- ・第120首「新年」(後編卷八147)

(2) 異同の中には、『黄葉夕陽村舎詩』の誤植を修正したと思われるもの、或いは『東瀛詩選』の誤植と思われるものがある。

①『黄葉夕陽村舎詩』の誤植を修正したと思われるもの

- ・第1～5首「感事贈拙叟」「齊」先生」其一～其五(前編卷一6・7・8・9・10)↓齋
- ・第26首(前編卷一91)「歲抄」寄中山子幹」↓杪
- ・第43首(前編卷四50)「望野間内海感源典廐作」…太原遺襲幸雄武、末路無如恣跋扈」↓扈
- ・第90首(後編卷三21)「寄題逢原堂」…怪君逢原果何源、流連恐將蹈素餐」↓原、陷
- ②『東瀛詩選』の誤植と思われるもの
- ・第4首(前編卷一9)「感事贈拙齋先生」其四…歸來抽架

居「書」、獨向櫺軒讀」↓居「看」

- ・第24首(前編卷一67)「上成川上即事二首」其一…欲問呼傍人、已被歸雲隱」↓傍

- ・第25首(前編卷一68)「上成川上即事二首」其二…傍人知我意、指點白雲間」↓傍

- ・第35首(前編卷二68)「柏谷途中」…昇平四海無閑地、墾破窮山幾疊雲」↓午

- ・第38首(前編卷三40)「開元琴歌西山先生宅同諸子分賦席上器玩余得此」…後千餘歲遇知己、始將戎洋布人寰」↓如

- ・第42首(前編卷四2)「夏日即事」其二…霜毛種種搔頭短、星曆匆匆轉眼更」↓歷

- ・第69首(前編卷八44)「西林寺詩會分得韻東」…清朝習俗年相變、僻地人文日向隆」↓戀、八

- ・第92首(後編卷三47)「早春雜詩」…鳥語知星曆、風光入野村」↓歷

(3)『東瀛詩選』の編纂の経緯と例言に見える俞樾の修改方針については、拙稿「『東瀛詩選』中廣瀬旭莊的詩」與『梅墩詩鈔』的比較」(『北研學刊』第二号、二〇〇五年)と、『東瀛詩選』における俞樾の修改—広瀬旭莊の『梅墩詩鈔』との比較を通して—(『中国学研究論集』第一六号、二〇〇六年)を参照。

(4)『東瀛詩選』には避諱を改めていない箇所もある。

- ・第76首(後編卷一38)「故福山侯聰敏公廟」…天下宗齊國、門材封楚丘